

聖衆来迎寺本六道絵 畜生図像小考

— 畜生道幅・人道苦相Ⅱ幅・天道幅 —

石川 温子

はじめに

天台宗の古刹・聖衆来迎寺に伝来した六道絵（以下本作）は、言わずと知れた鎌倉時代仏教絵画の優品である。本作は地獄道四幅（等活地獄・黒繩地獄・衆合地獄・阿鼻地獄）、餓鬼道一幅、畜生道一幅、阿修羅道一幅、人道四幅（人道不浄相・人道苦相Ⅰ・人道苦相Ⅱ・人道無常相）、天道一幅、閻魔王庁一幅、念仏功德説話を描く二幅（譬喩經所説念仏功德・優婆塞戒經所説念仏功德）の全一五幅で構成される。絹本着色、寸法は各縦一五五・五×横六八・〇厘である。寛和元年（九八五）に恵心僧都源信（九四二—一〇一七）が撰述した『往生要集』を主な典拠とし、絵画化した一三世紀の作品である。もと、源信が『往生要集』を著わした地、比叡山横川の靈山院に伝わり、元龜二年（一五七二）の比叡山焼き討ち前には聖衆来迎寺に移送され、現在まで伝来したことが旧軸木の修理銘より判明する。

当館へは一五幅のうち、一部をご寄託いただいている。昨年一月八日から二月四日にかけて当館で開催した「開館八〇周年記念展 壺中之展―美術館の小宇宙―」では、第五章「尊キモノ」にて

優婆塞戒經所説念仏功德幅一幅を展示した。今回、展示のため本作について調べるにあたり、畜生道、人道、天道の各境涯を表す幅に描かれた畜生の図像をめぐり、若干の知見を得たのでここに報告する次第である。

本稿では、食物連鎖（畜生道幅）、四種の馬（人道苦相Ⅱ幅）、白象（天道幅）の図像を取り上げ、従来の説に加えて、これらがさらに異なる意味を表していることを述べる。これらの小さくも豊かな意味を含む図像は、本作において『往生要集』を基礎とした六道輪廻の構想を支える重要な要素として機能しているのである。

一 畜生道幅【図1】

畜生道幅は、生物の種々の苦報を描く幅である。上部の色紙型題辭は剥落により現状では一部が判読不能であるが、加須屋誠氏が『往生要集』大文第一厭離穢土の畜生道解説部分の文言を検討し復元している^③。氏によれば次の通りである。

畜生道有二根本住 大海支末雜人天別論 有三十四億種類総論 不出三一者禽類二者 獸類三者虫類強弱相 害昼夜之中

常懷怖懼

畜生道には二種あり、根本（龍）は大海を住処とし、支末（その他の生物）は人道と天道を住処とする。個別に論ずれば三十四億種類になるが、総じて論ずれば三種を出ない。即ち一つ目は禽類、二つ目は獸類、三つ目は虫類である。強者と弱者が互いに害し合い、昼夜に常に恐れを抱く境涯であるという。『往生要集』本文に沿う内容が色紙型に記され、画面の情景の大枠が示される。

まず図像を確認しておこう。画面では、下部に大海を住処とする龍が三熱の苦（熱風熱砂、惡風、子の誘拐）に悶える姿を配し、中部から上部にかけては人道を住処とする三種の生物が使役や殺生、捕食など様々な苦しみを受ける姿を描出する。例えば、農耕の鋤引きや荷物の運搬に使役される瘦躯の牛馬【図2】、武士や獵師の狩獵の標的となる猪や鹿、雉、また生物間で捕食される魚や大蛇などである。

画中の生物は、その苦報により、あるいは根本の龍、支末の野生と家畜というようにも分類できる。龍ならば三熱の苦、野生ならば、一つ目は生物同士の憎み合う苦報（捕食、喧嘩）もしくは人間によつて殺生される苦報（狩獵、漁獵）を受ける。そして家畜ならば、人間によつて使役される苦報（農耕、狩獵、運搬）である。野生の生物は自由だが常に命の危機に怯え、家畜は常に使役される。家畜は野生よりも苦痛が少ない様に聞こえるが、『往生要集』には、「もしは象・馬・牛・驢・駱駝・驪等の如きは、或は鉄の鉤にてその腦を斲られ、或は鼻の中を穿たれ、或は轡を首に繋ぎ、身に常に重きを負ひて、もろもろの杖捶を加へらる。」とあり、屠殺や、鼻輪、轡、鞭打ちなどの身体的苦痛が伴う過酷さがあるとする。結局、畜生と

して生きるには、必ずいずれかの苦しみを受けねばならないのである。

ところで、画中には分類し難い図像が存在する。それは、猪が蛇を啗え、獵師がその猪を射ようとし、そして更に背後から羅刹鬼が獵師を槍で狙うという一連の図像である【図3】。表される生物に若干の差異はあるものの、このような命を狙う連鎖の図像は、北野天満宮所蔵「北野天神縁起絵」（根本縁起）巻第八、極楽寺所蔵「六道絵」左幅、禅林寺所蔵「十界図」阿弥陀幅、フリーア美術館所蔵「六道絵」畜生道幅、水尾弥勒堂所蔵「十王六道絵」右幅、明王院所蔵「光明真言功德絵詞」中巻、当麻寺所蔵「十界図屏風」右隻にも確認できる。

中野玄三氏や宮次男氏、加須屋氏らはこの図像を『往生要集』畜生道解説に説かれ色紙型にも記される、弱肉強食、食物連鎖を意味する「強弱相害」という言葉を表したものである^⑧。中でも加須屋氏は更に踏み込み、これを「強弱相害」の図像であるとした上で、その背景に次の話を想定する。つまり、登場する生物は異なるが『莊子』外篇山木第二〇にこの図像を彷彿とさせるような食物連鎖についての話が掲載されること、しかもその話は『今昔物語集』巻一〇第一三「莊子、畜類の所行を見て走り逃げたる語」としても翻案されていることを指摘し、この莊子の説話に図像の淵源を設定する。そして人間も自己の置かれた境遇を弁えないという点で、畜生と変わらぬ愚かな存在だとする訓戒的な内容がこの図像には含まれていると述べる。筆者は氏のこの見解に賛同するが、しかし他の解釈の可能性を加えてみたいと思う。

畜生道幅を見る際は、畜生へ感情を移入することが最も期待され

る鑑賞態度であろう。しかし、必ず畜生を主眼に考えなければなら
ないだろうか、という疑問が浮かぶ。畜生道幅の図像の見方につい
ては、加須屋氏の興味深い指摘がある。氏はこれらの図像が畜生の
苦しみであると同時に人間の悪行でもあるとする。

畜生から人間へとスポットライトを移してみると、畜生を苦しめ
る人間たちの姿が浮かび上がり、画中には、畜生を苛むあらゆる人
間の悪行が展開することに気が付く。とりわけ殺生行為は、例えば、
鹿を殺した者は等活地獄の別所である屎泥処に堕ちると『往生要集』
地獄解説部分で説かれるように、犯せば墮地獄が決定する悪行であ
る。^⑩

そのように視点を転換させた時、この「強弱相害」図像にも新た
な意味が加わってこよう。筆者はここに、人間の悪行（殺生）とそ
れに対する悪果（墮地獄）という、因果応報の様が描かれていると
見る。

猪が蛇を捕らえた。そこを狙って、次は獵師が猪を仕留める番で
ある。矢を番えて力強く弓を引く。その矢は猪をめがけて真っ直ぐ
に飛んでいく。次の瞬間、この獵師もまた背後の羅刹鬼によって忽
ち地獄に連行されてゆくのである。

中世仏教説話画において俗人と共に描かれる鬼形には、死者の元
へ火車で来迎する獄卒、あるいは本作の人道苦相Ⅰ幅に見る様に病
者に取り憑く鬼などがあり、死にまつわる存在として描かれる。そ
うであるならば、食物連鎖図像の羅刹鬼も獵師を死へ導くことが予
想され、殺生を犯すことから墮地獄の死がもたらされよう。

この一連の図像には、殺生という悪行をなす獵師が、それを悪因
として地獄へと堕ちる運命が図示されているよう。男の行き先の凄惨

なことは本作の地獄幅に描かれる通りである。また羅刹鬼の持つ槍
が、等活地獄幅で罪人を追いやる獄卒と同様の二叉の槍であること
も、この羅刹鬼が地獄に属することを暗示する。

しかしこの男は単なる一例に過ぎない。畜生道幅で殺生を犯す者
全てに、やがてこの男と同じ悪果が到来することが予期される。ま
た、加須屋氏が具体的な畜生道転生の説話を挙げて指摘するように、
殺生に限らず畜生を使役する人間も同じく、その報いとして来世は
畜生道に生まれる予備軍として見つめられたかもしれない。^⑪ 畜生道
幅を見る者は、畜生への憐憫の情を懷くと同時に、それらを苛む人
間の末路に戦慄し、自戒の念を強めたことだろう。

画中に人の悪行を見るならば、畜生道幅は畜生道を描く絵であり
ながら、他方で人道をも含んでいるとも言える。一幅内に畜生道と
人道とを併存させ、さらには地獄道に連なる要素さえ垣間見せるこ
とで、各境涯が因果応報の論理により密接に関わり合うことが明示
されている。では反対に、人道の中の畜生図像はどうだろうか。

二 人道苦相Ⅱ幅【図4】

人道苦相Ⅱ幅は、人道の八苦（愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、
五盛陰苦）を描く幅である。『往生要集』大文第一厭離穢土の、人
道の苦しみを解説する部分に対応し、そこで「もろもろの余の苦相
は眼前に見るべし。」と略述される文言を戦や火事などで表象する。
その中に畜生の苦しみを伝える図像が認められる。

画面上部、火事に駆け付けた検非違使と思しき4人の乗る馬は、
嚙く仔馬（左下）、勢いよく駆ける立派な体躯の馬（右下）、冷静な
歩みを見せる逞しい馬（左上）、ようやく火事場に辿り着いたらし

い老いさらばえた馬（右上）に描き分けられる【図5】。騎乗する人間もそれらに対応するように、若い小柄な男子、興奮気味に火事に目をやる青年、慣れた様子の鉢巻の男、力なく馬に身を任せる年老いた男という外見である。ここには、少年、青年、壮年、老年の四種の人馬の組合せが描かれていると言えよう。

『往生要集』で人道苦が語られる箇所⁽¹³⁾に、このような人馬の老いについての記述はなく、また人道苦相Ⅱ幅の色紙型題辭にもそれを語る文言はない。しかし、人道の無常を説く部分に注目すべき記述がある。『涅槃經』卷二の偈を引用する箇所である。⁽¹⁴⁾

一切もろもろの世間に 生ける者は皆死に帰す 寿命、無量なりといへども 要必ず終尽することあり それ盛んなれば必ず衰ふることあり 合ひ会へば別離あり 壮年も久しく停まらず盛んなる色も病に侵さる 命は死の為に吞まれ 法として常なる者あることなし

末尾の「法」とは、この世に存在するすべての者と考えられ、ここには生きとし生けるものが無常であることが説かれる。人道苦相Ⅱ幅の四種の馬と人とは、全ての生物がそうした生死の摂理から逃れられないことを象徴するのではないだろうか。画中において、これらの馬は人間の乗物として描かれるが、実際はそれ以上の象徴的な意味を負わされているのである。

留意しておきたいことは、この根拠と考えられた『涅槃經』の偈が、人道無常相幅に対応する節の記述だということである。次章に述べるように、四種の馬と天道幅の白象の図像は、各幅に対応する『往生要集』の節で言及されるのではなく、他の境涯が語られる節に見られる内容を引き込み、描いていると考えられるのである。

三 天道幅【図6】

天道幅には『往生要集』大文第一厭離穢土の、天道解説部分に説かれる内容にほぼ忠実に、忉利天における天人の苦報である五衰の態⁽¹⁵⁾が描かれる。色紙型題辭も『往生要集』を典拠とする。画面中央やや下で頹杖をつき地面に寝そべる人物が苦報を受ける主役である。この五衰の苦報を受ける人物については、装束や『往生要集』本文の詳細な検討によって、従来言われるような天女ではなく忉利天の主、帝釈天その人であるとする山本陽子氏の指摘がある。⁽¹⁷⁾

画面左上隅は雑林苑（西の庭園）、画面右上隅は歡喜苑（北の庭園）、画面中央右に衆車苑（東の庭園）、画面中央左に鹿洩苑（南の庭園）、画面下には曼陀栴尼と呼ばれる池がある。中央には帝釈天の居城である善見城が配され、その宮殿の右隅に白象とそれに対面する男の姿が認められる。【図7】

この白象については、色紙型題辭に言及はない。『往生要集』天道幅解説部分の「殊勝殿の中には永く瞻望を絶ち、釈天の宝象にはいずれの日か同に乗らん。」という文言を表し、主を失い寂寞とした宮殿を印象付ける添景であると、先学の見解は一致を見る。それには筆者も同意するところであるが、象に向かう男の存在が、この図像にさらなる意味を加えていると考える。

象は背に鞍や鞍褥を付ける。口を開け、舌を反らせて歯牙を見せ、首は下げつつも視線は上げたまま、対峙する人物から目を反らさず威嚇するような表情である。四つの足で踏ん張るが腰はやや引き気味に見える。

対する男は、右手に鞭を持ち、左掌でその先端を受ける。装束は

上衣の上に胸部から下腹部までを覆うように布を当て、腰紐で括るというもので、いわばエプロンを付けているようなスタイルである。これは人道無常相幅において狐を狩る男や、水牛を屠殺所に誘い出す男に共通するため、この男もまた生物を扱う職能を有する人物と考えられる。また鞭を手に行することから、御者と判断できる。以上を踏まえると、象はこの鞭を持つ御者に怯えている、もしくは反抗していることと見ることで、「宝象」を表すのみとするにはあまりに状況設定が詳しい。

この図像に宝象という以外の性格が付与されているとすれば、それはどのようなものであろうか。端的に言えば、この白象には、天道に住まう帝釈天の乗物という側面と、天道においてもなお、自由がなく使役される畜生という側面の二つの性格が与えられていると筆者は考える。

象に向い鞭を持つ御者の存在は、その考えを確信させる。鞭または杖を手にした人間により使役される牛馬の図像は、畜生道幅に確認でき、その関係性は天道幅の御者と白象と同じである。また、象が使役される図像は「根本縁起」巻第八の畜生道部分に認められるものであり、象が労役に従事させられる動物であるという認識があったことも確かめられる。かつ、既に「一 畜生道幅」で引用した様に、象は使役される動物の筆頭に挙げられてさえいる。そのように見れば、この浅黒い肌を持つ男の、眉目を吊り上げ、少し口角を上げた横顔にはサディスティックな気性まで読み取れるようである。

また先に確認したように、『往生要集』畜生道解説部分と畜生道幅の色紙型題辞には、「畜生道の支末は天道と人道に雑わる」とあることを思い返してほしい。既に、畜生道と人道とは混ざり合い世

界を構成していることは述べた通りである。人道幅や天道幅の中に畜生道の苦の要素を見出すことは、『往生要集』の内容に適うのである。この象もまた二つの境涯を背景に持つ図像といえよう。

最後に典拠箇所指摘もしておきたい。白象の図像の根拠とした『畜生道の支末は天道と人道に雑わる』という文言は、『往生要集』大文第一厭離穢土の天道幅が対応する節にはなく畜生道解説節（畜生道対応箇所）にあった。また先述の如く、人道苦相Ⅱ幅の四種の馬の図像の根拠とした偈は、同書の人道苦相Ⅱ幅が対応する節にはなく、人道の無常を解説する節（人道無常相幅対応箇所）にあった。このことは、本作が単に『往生要集』の六道についての解説を縦割りにし、一対一対応で六道を絵画化するのではなく、その内容を咀嚼し、一五幅の画面上に再構成しようとする態度であることを示している。

おわりに

以上、畜生道幅・人道苦相Ⅱ幅・天道幅の畜生図像を部分的に取り上げて知見を述べた。畜生道幅では、人間に害を加えられる生物の図像は、同時に人間の悪行を表していると見方を転換することにより、従来食物連鎖を示すとされる「強弱相害」の図像に、因果応報の論理を読み解いた。即ち、猪を狩るという悪行をなす獵師は、殺生を悪因として、背後の羅刹鬼により地獄堕ちの悪果を受けることが仄めかされるのである。

人道苦相Ⅱ幅には、人の乗物として若きから老いまでの四種の馬が描かれる。これらは『往生要集』において人道の無常を解説する節に引用される『涅槃經』の偈を表すと考えられた。つまり、全て

の生物がこの生死の摂理からは逃れられないという偈の文意を表象するのである。なおかつ、ここには人に使われ一生を終える畜生の苦さえも読み取れるかもしれない。

天道幅の白象は、これまで帝釈天の乗物との認識しかなされていなかった。しかし『往生要集』畜生道解説部分や、畜生道幅上部色紙型において、畜生は人道と天道に混ざり存在することが説かれていることや、象に対峙する御者の存在が、畜生道幅で使役される牛馬と、その傍らで鞭もしくは枝を手にする人物を連想させるものであることから、この白象は帝釈天の宝象であると同時に、畜生として使役される象であると読み解くことが可能である。

ここにこれらの畜生の図像が多義的であることが示されるのである。これらの複数の側面を持つ図像が存在することにより、畜生道幅には人道が、人道苦相Ⅱ幅には人道の無常あるいは畜生道が、天道幅には畜生道が共存すると言えよう。各境涯を表す各幅が、それぞれ完全に孤立するのではない。多義的な図像を介して、『往生要集』に示される、一切諸法が流転する六道の各境涯が結びついているのである。本稿で取り上げた他にもこの様な図像がまだ隠れているかもしれない。

このように聖衆来迎寺本六道絵のうち、複数幅の間に何らかの関連があるとする構想は、既に地獄道四幅に構図上の繋がりを見出す山本聡美氏^⑨や、阿修羅道幅と天道幅が両幅に共通する帝釈天を通じ一連の話を構成するとする山本陽子氏^⑩により提示されており、本作の全体像を検討する上で考慮すべき視点と思われる。

本作は、六道一二幅、閻魔王庁一幅、念仏功德二幅という、性格の異なる幅により構成される。それゆえ全体を通しては、多様な解

釈の可能性が開かれていると言える。上記の様な図像を通じた各幅間の連関が見出せれば、その先に本作全体の読み解きも改めて展望されるだろう。

(大阪市立美術館学芸員)

- 1 「人道苦相Ⅰ幅」「人道苦相Ⅱ幅」という呼称については、次の書籍に準じた。泉武夫・加須屋誠・山本聡美共編著『国宝 六道絵』、中央公論美術出版、二〇〇七年
- 2 本作の研究史や伝来については山本聡美氏により総括されている。修理銘の存在は、蓮実重康氏が初めて報告し、それを受け大串純夫氏が詳しく検討を加えている。また本作の図像に関しては、全幅の図像を検討する加須屋氏の論考がある。山本聡美「国宝「六道絵」の修復と移動」前掲註1『国宝六道絵』所収（下記論文を加筆訂正増補し再掲。井上聡美「聖衆来迎寺所蔵『六道絵』の修復と移動」『美術史』第一五六号所収、二〇〇四年）、蓮実重康「表具師能阿弥と来迎寺十界図」『美術史』第一〇号所収、一九五三年、大串純夫「六道絵新資料」『国華』第七五三三号所収、一九五四年、加須屋誠「図様と位置づけ」往生要集絵の成立と展開」前掲註1『国宝 六道絵』所収、加須屋誠「全場面解説」前掲註1『国宝 六道絵』所収
- 3 加須屋誠「聖衆来迎寺本六道絵「畜生道図」私見」『帝塚山学院大学論集』第三〇号所収、一九九五年、四〇頁
- 4 『往生要集』大文第一厭離穢土、畜生道解説部分に「もろもろの竜の衆は、三熱の苦を受けて昼夜に休むことなし。」と記す。原漢文。石田瑞鷹校注『日本思想大系六源信』岩波書店、一九七〇年、三三頁。以降本稿では同書掲載の訓読文に基づきこれを引用する。また加須屋氏によれば三熱の苦とは、『長阿含經』卷一八の閻浮提州品に説かれる、熱風熱砂により皮肉骨髓を焼かれること、悪風により装身具が剥ぎ取られること、金翅鳥により子を誘拐されることの三態である。前掲註3 加須屋氏論文、四八頁
- 5 前掲註4『源信』三三頁
- 6 梅津二郎氏により紹介された。光明真言による功德を描く。滋賀・明王院所蔵。奥書により応永五年（一三九八）の制作になることが知られる。梅津次郎「光明真言功德絵詞」『美術研究』第一一二号所収、一九四一年
- 7 食物連鎖の図像は、羅刹鬼を含むものと含まないものがある。前者は本作の他に、極楽寺所蔵「六道絵」、当麻寺所蔵「十界図屏風」、明王院所蔵「光明真言功德絵詞」に確認できる。
- 8 中野玄三「天台宗の六道絵」『佛教芸術』第一七二号所収、一〇六頁、一九八七年、宮次男「聖衆来迎寺の六道絵」『六道絵』第二七一号所収、至文堂、一九八八年、五四頁、前掲註1『国宝 六道絵』所収、加須屋氏

- 9 「全場面解説六畜生道」、二八八頁、前掲註3 加須屋氏論文、四六一四七頁
- 10 前掲註3 加須屋氏論文、四四一四六頁
- 11 「一には、屎泥処。（中略）昔、鹿を殺し鳥を殺せる者、この中に墮つ。」前掲註4『源信』一二頁
- 12 なお時代は下るが、明王院所蔵「光明真言功德絵詞」（応永五・一三九八）では、人道の段に鹿や猪の狩猟の図像を描くことから、ここでは殺生が人道の行為として認識されていることがわかる。
- 13 『今昔物語集』卷一九第三「内記慶滋保胤出家のこと」や『日本霊異記』卷上第一〇「子の物を偷み用ゐ、牛となりて役はれ、異表を示す縁」、同第二〇「僧、湯を湧かす薪をもちて他に與え、牛となりて役はれ、奇表を示す縁」などを挙げる。前掲註3 加須屋氏論文、四四頁、五六頁
- 14 人道苦相Ⅱ幅色紙型題辭「愛別離苦者依癡愛非悲別 離怨憎會苦者翫宿惡申現 惡成怨念懷害心求不得苦 者食不滿口衣不隱膚風雨 侵家燈燭苦光五盛陰苦者或遇火災或逢盜賊慮外細苦即此苦相」前掲註1『国宝 六道絵』所収、山本聡美「図版六道絵 二：人道苦相Ⅱ幅」九二頁
- 15 前掲註4『源信』三九頁、偈は大正藏二一、六二二下頁に記載
- 16 「一には頭の上の花鬘忽ちに萎み、二には天衣、塵垢に著され、三には腋の下より汗出で、四には両の目しばしば眊き、五には本居を楽しまざるなり。」前掲註4『源信』四一頁
- 17 天道幅色紙型題辭「切利天雖快樂無極命終時五「衰相」有悲帝釋宮中永斷瞻望「衆車苑」砌無復能見劫波樹下「白玉栗石」絶「殊」勝池水沐浴無由四種甘露「」令不可嘗五妙音 樂此後不可聽」前掲註1『国宝 六道絵』所収、山本聡美「図版六道絵二：天道幅」一一二頁
- 18 山本陽子「聖衆来迎寺本六道絵「天道幅」小考」『明星大学研究紀要 日本文化学部・言語文化学科』第一四号所収、二〇〇六年
- 19 前掲註4『源信』四一頁
- 20 山本聡美氏は、図像と構図上の共通性を見出す。地獄道幅四幅に共通して描かれる堅牢な城門が、はじめの等活地獄幅から黒繩地獄幅、衆合地獄、阿鼻地獄幅へと、次第に少しずつ下部にずれながら連続するように表されることは、地獄の階層構造を視覚化したものであるとする。山本聡美「階層化された地獄：聖衆来迎寺蔵「六道絵」地獄幅四幅および閻魔王庁幅の構図をめぐる」『共立女子大学文芸学部紀要』第五七号所収、二〇一一年

山本陽子氏は、天道幅と阿修羅道幅に図像、意味上の対応関係を見出だす。氏はまず天道幅中央で寝そべる人物は、阿修羅道幅に見る帝釈天に通ずる装束であることから、この人物を帝釈天とする。また阿修羅道幅に展開する阿修羅と帝釈天の戦闘で敗色濃厚なのは阿修羅の軍勢と見、勝利を掴み天人として豊かに暮らす帝釈天さえも、終にはこのような悲しき末路を辿るという一連の話を想定する。前掲註17山本陽子氏論文

「付記」

本稿の執筆に先立ち、平成二七年夏に、学習院大学佐野みどり教授の調査に同行し、聖衆来迎寺御所蔵の六道絵一五幅を拝観させていただきました。その大変貴重な機会とこの度の画像掲載のご許可を頂戴致しました、山中忍恭御住職に深謝申し上げます。また、調査に伴っていただきました、佐野教授にも心より御礼申し上げます。なお、挿図は全て泉武夫・加須屋誠・山本聡美共編著『国宝 六道絵』（中央公論美術出版、二〇〇七年）から転載させていただきました。

【図1】 畜生道幅



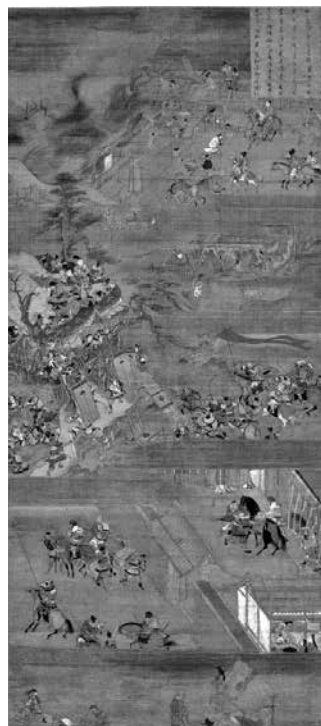
【図2】 畜生道幅 使役される馬



【図3】畜生道幅 食物連鎖



【図4】 人道苦相Ⅱ幅



【図5】 人道苦相Ⅱ幅 四種の馬



【図6】 天道幅



【図7】 天道幅 白象

